

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	感想：文苑
Author(s)	下村，彌一
Citation	龍南， 1 8 1： 1 0 4 - 1 0 7
Issue date	1922-03-10
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/7855
Right	

感想

自分は今まで一度も投稿もしたことない又演説會などで演説したこともない、それは無精な爲でもあるが然し自分が貧弱で何も持合せがないためであつたらしい、これとてもどうせ催促されて書くやうなわけでこれといふこともないが然しもうすぐに龍南を去ると思ふといくら鈍感でも何か思ひあたるやうである。

龍南に來た頃先輩からよく「諸君が龍南の門を去る時には感謝の念を持つて去らるゝやうに努力せよ」といふ意味の言葉をよく聞かされたものだが今になつて見ると本當にあんな先輩の氣持がよく分るやうな氣がする。

夢のやうな過去三年を回顧すると只もう感謝の二字あるのみである、勿論三年間にはよい事ばかりはなかつた、不平もあれば失敗もあり醜さもあれば不如

下村 彌 一

意もあつた然し今はすべてのものを肯定したなつかしいやさしい丁度慈母の子におけるやうな氣持である、醜も美も不平も満足もすべてのものがよく調和し一圓となつて美しい美しい夢のやうな感じがする涙ぐましいほど有難い、そして何故有難いかわからずにやつぱり有難い。

自分は入學の當初から出來る丈けあらゆる事をしやうと思つてゐた、遊びも勉強も騒ぎも茶目も登山も遠足も考へも酒飲みも戀愛も道を求むることもいろいろの趣味も、然し元來無精な自分がすべてのことが出來やう筈がない、勢ひ出來易い事ばかりして少しでも努力の要る事はちつともせずによろ／＼して過してしまつた、そして元の木阿彌、何にも得るところがないやうな氣がする、然しそれにも拘らず矢張りこの龍南三年の生活に感謝せざるを得ぬ柄にな

いことかも知れぬが人生といふ一つの怪物見たやうなものを見つけたのも龍南に來てからの事であつた。そしてその怪物は考ふれば考ふるほどわけの分らぬものになつてしまつて此頃に至つてはさつぱり分らぬものゝやう思はれて嘆聲をさへ發することもあり介厄なものに出會つたものだと思ふことさへあるがそれがため龍南生活に對する感謝の念の薄らぐ事はない否却て増すばかりである。

純粹な理想的な意味に於て私の全生活は龍南生活にあると云ひたい、従て私はこの龍南生活を一生の核とし基調としたい私はつくづく「角帽の悲哀」といふことさへ考へて見る事がある、然し私は只單に挾義の龍南生活のみを讚美し感謝することに止らない、私のこの龍南生活を讚美し感謝する氣持は直ちに到る處總ての物を讚美し感謝する氣持であらうと思ふ又それでなければつまらぬ、到底やつて行けぬ。

考へて見れば自然もよいが世の中もすべてそれら人間に至つてはもつと面白い、世界のものはすべてそつくりそのまゝでよい、美も醜も善も惡も困難も歡樂も悲痛も悦びも生も死も其他一切のものがなくては

ならぬものばかりである、こんな極端から極端のやうに見ゆるいろ／＼のものが混然融和して何とも名のつけられぬ、美とも醜とも善とも惡とも悲しみとも悦びとも云はれぬものを形作つておる、一寸考へると本當に矛盾してゐるやうであるが何ともかとも云はれぬ微妙さで調和してゐるらしい、否調和以上に即してゐるらしいシラーは「汝は美に非ざれば美を認めざるか然らば汝は眞の美を知らざるなり」といつたやうである、スキリストは罪人をば人間の完成に最も近い者として愛したやうである、面白い盜賊をくだ／＼しい正直者に變ずるのは彼の目的ではなかつたやうである、又佛家は「生死即涅槃」といふ、こんな事は矛盾であるやうだが實はさうではないらしいそしてこの邊の消息は無限に面白味があるやうに思へる、自分の友達に萬年床やらして着物でも本でも密柑の皮でも鼻紙でも室内すきまなく散らす男があるが他人が立派に片附けてやるとブンブン怒つて「氣のきいた人簡は不整頓の整頓を整頓せる不整頓に直す」といつてゐたが面白い事だと思ふ。こんなになると整頓が整頓でなく不整頓が不整頓で

もなく、結局そくりそのまゝでよい事になる、惡も惡でなく善も善でなく何とも云はんでそくりそのまゝで面白い、意義がある。

惡とか善とかは我々が便宜上假りにつけたのである。そしてこれらは相對的のものである。然るに昔から性善とか性惡とか論議されてゐるが何れも根本にはふれてゐない、我々が假りにつけた言葉の概念についての争ひにすぎぬ、況んや相對的に名づけたこの二つに對して絶對に一方に歸せやうとするに於てをやである、總てのものは一方に片づけてしまはれないやうな感じがしてならぬ、對体に惡なるものと絶對に善なるものとが對体に純なるものとが又絶對に不純のものとか決して一方にのみ片づけてしまはるべきものではないと思ふ、それは之等極端から極端と思はるべきものが人間の知らないやうな不思議な方法で即してゐるからである、「惡に強ければ善にも強い」といふこともある。この世のすべてのものが微妙に一大調和をなしてゐるからである、それで或る人が「僕の生活は灰色さ」といった、自分はこれに多大の興味をおぼれた、どうせ相對なるものが絶對

に憧憬れ有限なるものが無限に一致せんと焦つてゐるのであるから其結果は結局大概の人が灰色位かと思はれる、不完全なるものが完全たらんとして努力してゐるところ、灰色たらざらんとして苦しみ苦しみがあつても知らぬうちに灰色になつて行くところが無上に面白い而もその苦しみが大なれば大なるほど人生は面白い執着がある、然し本當を云へば自分は人生を灰色だと云ひたくない、自分はこんなことを考へて見た、日光にざつと七色がある、この日光にある七色の繪具の色を人間がうまく調合すると灰色のやうになるそうである、然し日光はすべての色を持つてゐるけれども人間よりももつともつと巧くとても人間の知らぬやうな調合法で空とも何とも名のつかぬこの日光になつてゐる、それは灰色でも何でもない、空とも何とも云はれぬ、我々は日光が色からなつてゐる事にも全然氣がつかぬ、我等の生活の調和もこの氣がつかぬ位の大調和に達したいものである、灰色位ではまだ／＼仇つはい、然りこの世には善もあれば惡もある、美もあれば醜もある、悦びもあれば悲しみもある、生もあれば死もある、

絶對もあれば相對もある、肉もあれば靈もある、主觀もあれば客觀もある、然しすべて之等のものは小否定に不調和を越えた大肯定大調和があるべきはづである、佛家の「無自無他凡聖等一」といふのも「天地同根萬物一体」といふのもこの邊の消息かと思はれる。

龍南生活の回顧がそれから飛んでもないところ、に脱線して濟まぬ、自分は何かにつけてすぐ偉そうな文句を使ひたがるので困つた癖だが要するに龍南生活で得たものは「よりよく人間を知つた」といふことにすぎぬ、三年間に無闇に感激したり興憤したり泣いたり笑つたり飲んだり騒いだり戀したり失戀したりしてよりよく人生を知り人生の目的などといふ事は皆自分らんなりにも人生の本當に面白い事人間の本當に愛すべきものなること世の中の見棄てたものでないことを知るに至つたのみである、書けば書くほどぼろが出る、もう大概分にしてよしませうこんなものでも辛棒して最後まで讀んで下された人にお禮を云ひます。

終りにこのなつかしい龍南を去るにのぞんで特に私

はいろいろの關係から龍南九百の健兒諸兄に衷心感謝の意を表します。